

知識科学に基づく科学技術の創造と実践

Knowledge-

Vol. 5
2007 秋

JAIST
JAPANESE AGENCY OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

ナレッジ
ビート

Beat

21世紀COEプログラムとは？

日本の大学を世界的研究
教育拠点へ育成するための
文部科学省の重点的支援。

COEとは「Center Of Excellence
(卓越した拠点)」の略です。

【特集】COEのプロジェクト紹介

水谷プロジェクト
モバイルBUMを利用した
研究室ナレッジマネジメント

新しい
知識共有の場から、
イノベーション
が芽吹く！

シリーズインタビュー

はばたく！

知の
コーディネータ

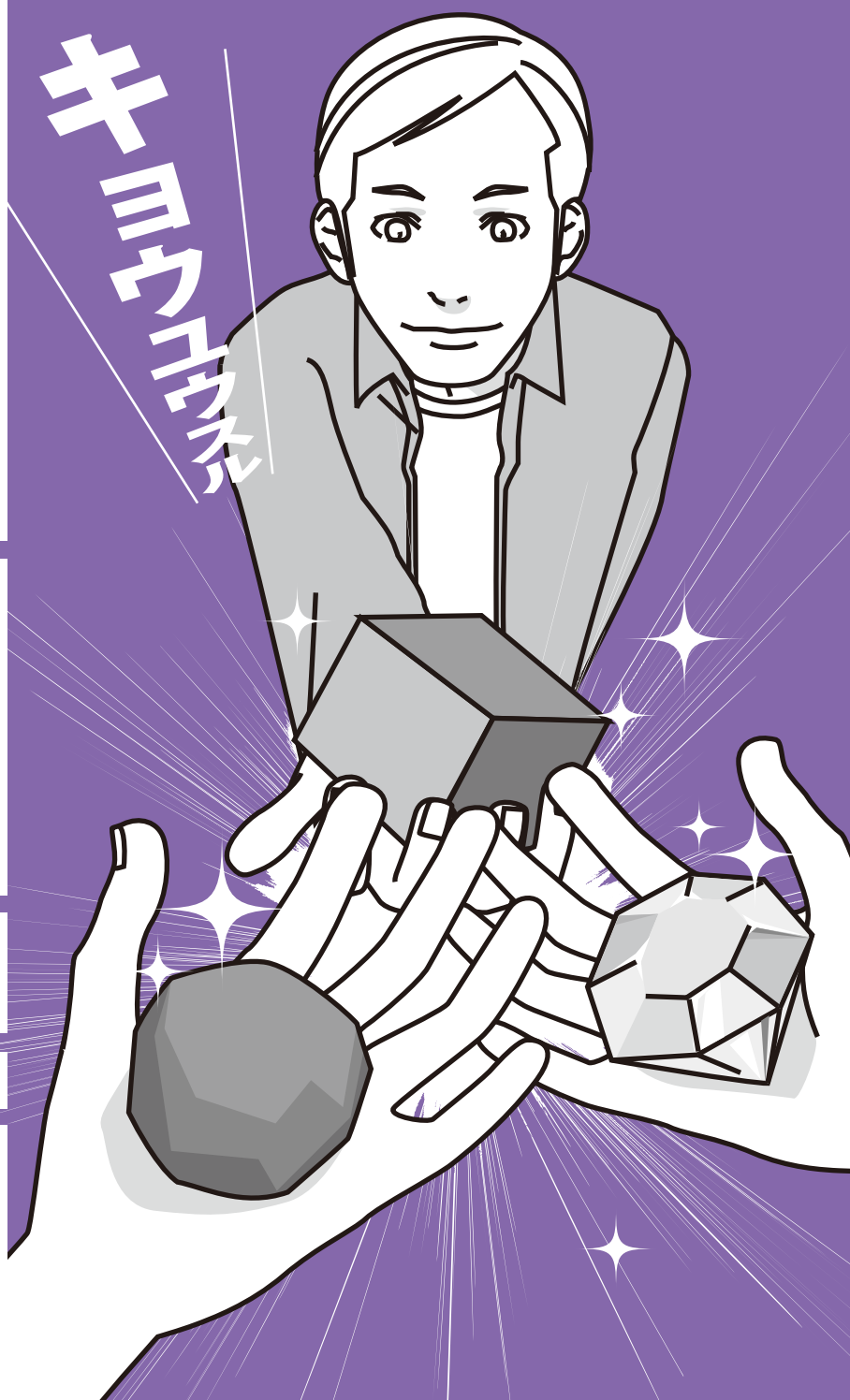
COEプログラムの“DC”
トップランナー

COE NEWS

COEリーダーは考える⑤

研究室
ナレッジマネジメント

コミュニケーション



COEのプロジェクト紹介

モブアルバムを利用した研究室ナレッジマネジメント 水谷プロジェクト 新しい知識共有の場から、 イノベーションが芽吹く!

ある個人が持っている10の知識。自分一人のものにとどめておくだけなら、10のまま。

しかし、研究室全体で、大学中で、世界中で、情報を共有できたなら?

10×10、10×100の化学反応がおこるかも!

COE水谷プロジェクトでは、カメラ付携帯電話を使って、言葉では表現することのできない現場の情報を、研究室メンバーがリアルタイムに共有。さらにそこから新たな知識創造がおこることが期待されている。

メンバーが
いざなう

水谷プロジェクトのツボ

水谷プロジェクトの全容を探るべく、編集部はマテリアルサイエンス研究科の水谷研究室に潜入した。同プロジェクトメンバーの吉永崇史(科学技術開発戦略センター研究員)にいざなわれ、いざ、新しい知識共有の舞台へ。



吉永研究員

水谷研究室では、固体の表面でおこる現象を、レーザー光をあてて観察するとともに、レーザー光と表面との相互作用について解明しようとしています。COE水谷プロジェクトでは、この6つの研究班で、情報共有ツール「モブアルバム」を使ってもらっているんです。



これが「モブアルバム」です。「モブアルバム」は、カメラ付携帯電話で撮影した画像を、Web上にリアルタイムに掲載するシステム。Web上で、現場の知識をリアルタイムに共有・保存することができます。「コメント」も付与できます。

実験器具の
配置が決まった



「光第二高調波発生法による『金』高指数」研究班(通称「金班」)の実験室にお邪魔しました。

写真に撮って
モブアルバムに
保存しておこう

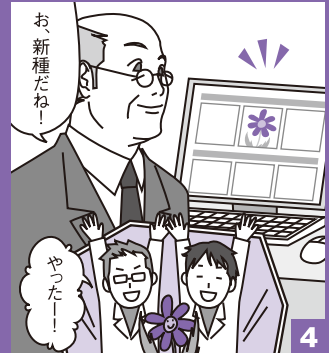


カメラ付携帯電話で
実験器具の配置を撮影。

メモがわりにもバシャ!



ナレッジ君は文と理を融合させたり、みんなの要望をうまくまとめて成果を産み出す、知のコーディネータ!!



撮ったその場で送信。
リアルタイムにWeb
上に掲載される。

画像は新着順に表示され、
全ての研究班の最新の実験活動が一望できる。



これはいいね

撮影者にメールで
問い合わせよう



みんなで一覧画面を眺め、意見交換。研究活動のパフォーマンスもあがってきた。

実験の様子などを携帯電話のカメラ機能やデジタルカメラで撮影することはあったのですが、その情報は、個人の手元にあるだけで、研究室全体で共有するには至っていませんでした。また、撮った写真はすぐ整理しないと分からなくなってしまうのですが、整理に時間や手間がかかれば、かえって研究活動の妨げになるというジレンマを抱えていました。

でも、モブアルバムのおかげでそれが簡単にできるようになったんです。



水谷教授

コレが水谷プロジェクトだ！



水谷教授、水谷研究室の学生、
モブアルバムの開発技術者、COE研究員です。

研究室パフォーマンスのさらなる向上へ

進化する水谷プロジェクト

本年度から導入され、早くも様々な成果を生んでいるモブアルバム。
さらに効果を高め、イノベーションへとつなげていくべく、意見交換会が重ねて開催されている。



7月23日(月)、本プロジェクトの3回目の意見交換会が開催された。利用者の立場から、水谷教授、水谷研究室の学生が参加し、それに、モブアルバムの開発技術者、水谷プロジェクトのメンバーを加えた、総勢16名が参加した。

まず、学生がモブアルバムの活用事例を続々と報告。水谷教授も、「なかなか現場に行く暇がないが、現場に関わらないと、その研究の進行状態がわからなくなってしまう。そこで

最近では、その現場に行って、ざっと写真だけ撮ってくることにしている。モブアルバムのいいところは、撮ったらすぐ忘れてもいいところ。プロジェクトがどういうふうに進行していったかをこれでいつでも思い出せるし、後でプロジェクトの報告をしなければならないときにも使える」と、自身の使い方を披露した。

その上で、システムをより効果的なものにしていくための改善提案として、学生たちから

「画像を一括ダウンロードできたらいい」、「将来的に画像の枚数が多くなってきたら、検索機能がほしい」などの意見が挙がった。開発者は、「連続して撮るのは難しいが、15枚程度ためて、一括してWebに送ることは技術的にはできる」、「検索機能については、技術的にはもうすぐ可能」などと回答した。

さらに、水谷教授から、「実験中に、『煙が出てきた!』といった非常事態のときにも、その様子をバツと送って、私に『画像を見てください』と判断を仰ぐこともできる。実験をしていると、音声や文字では伝わらないものもたくさんあるからね」という提案もあった。

貪欲に成果を求める水谷プロジェクト。モブアルバムがイノベーションを興すときも近いかもしれない。

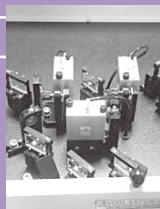


活発に質問や意見が飛び交う。

意見交換会で聞いた!

モブアルバムの活用事例

CASE1



光学系実験器具の配置(H₂O班)

モーターで動くような実験器材の位置を合わせるのは非常に難しく、最初に位置決めするのはひと苦勞。でも、実験後に配置を崩さなければならないこともある。「実験を始めるとき、一番知りたいのは、『前ははどうだったかな』ということ。だから、位置決めしたら、記録しておけるのはとてもありがたいですね」。

CASE2



真空チャンバーのボルトを締める順番(金班)

例えば、真空状態にするための機械「真空チャンバー」。「ボルトを順番どおりに締めないと、きちんと空気を締め出すことができないんです。締める順番は真空チャンバー本体に書き込んであるものの、真空状態が確かめるために、エタノールで拭いているうちに、その数字が消えてしまう。モブアルバムで記録しておけば心配ありません」。

CASE3



灰色の酸素ボンベ(金班)

水谷研究室の全ての研究班で使用するレーザー装置は窒素ガスを利用する。そのため、窒素ボンベは必須アイテムなのだが、酸素ボンベと取り換えやすい。ある学生は、「同じ間違いを繰り返さないように、モブアルバムで他の学生に注意を呼びかけました。以来、その間違いはおこっていません」。情報共有されることで、同様の失敗が回避されたわけである。

CASE4



素子立て(顕微鏡班)

モブアルバムでは、全ての研究班の活動が一望できる。「同じ水谷研究室であっても、他の班の実験現場には行くことがなく、何をやっているのかほとんど知りません。モブアルバムで初めて、他の班の手作り実験器具「素子立て」を見て、『これは便利だな』と思いました。僕たちもさっそく作ります」。

水谷教授・ 吉永研究員が語る これからの研究室 ナレッジマネジメント

吉永「皆さんが情報を共有しようとする気持ちになってくれたのはCOEとしての大きな成果です。」

水谷「研究室としても、学生たちが記録することに目覚めた意義は大きいですね。教員の立場から言うと、学生のパーソナリティが見えるし、昼食時の話題にもなる。研究室のコミュニケーションという点では非常に重要です。最近、ある人が撮影した写真に別の人がコメントをつけるという“遊び”が自然発生しています。おもしろい現象です。」

吉永「これは大きな意味があります。知識共有システムは、いかに使ってもらうかでみんな苦労し、いろいろな仕掛けをしているんです。こうして“おもちゃ”として使ってもらえるのは、立派な動機付け。知識共有システムに新しい提案ができる可能性があります。」

水谷「将来的には、記録や緊急連絡のための標準ツールとして私の研究室のルールにすることも考えられます。」

吉永「さらに研究を進めながら、皆さんに喜んでもらえるシステムにしていきたいですね。」



シリーズインタビュー

はばたく! 知のコーディネータ ②

JAIST-COEから大空へ飛び立とうとしている
知のコーディネータを紹介

北陸先端科学技術大学院大学
科学技術開発戦略センター 研究員

吉永 崇史(31歳)

YOSHINAGA Takashi

PROFILE

1976年3月生まれ。大阪府出身。青山学院大学国際政治経済学部卒。
中央三井信託銀行勤務を経て、2002年4月に本学知識科学研究科入学。
2007年9月、同博士後期課程修了後、現職。



—JAIST入学の動機を教えてください。

大学卒業後、東京で銀行員として働いていたのですが、元々持っていた「研究者を目指したい」という思いが強くなり、まず独学で経営学の勉強を始めました。大学院への進学を決意したのは、その頃に読んだ野中郁次郎先生(元・本学知識科学研究科長、現・一橋大学名誉教授)の『知識創造企業』という本がきっかけです。その本では企業経営における「知識創造」の必要性が説かれていたのですが、それは銀行に勤務している中で私も強く感じていたことだったので感銘を受けたのです。そこで「知識創造」「知識経営」をキーワードとして調べていくうち、本学の「知識科学研究科」に出会いました。

—JAISTでの研究やキャンパスライフについて。

とにかく猛烈に勉強しました。講義の質が高く、課題の量も多いため、徹夜することも度々ありました。2ヶ月単位で修了していく講義のお陰で、次々と新しい課題に向き合う姿勢が必要でしたが、好奇心旺盛な自分には向いていたと思います。研究は遠山研究室に所属して、経営学を軸に取り組んでいました。また、21世紀COEプログラムに参加してからは、学科や分野の壁を越えて教育学や物理学などの学問にも取り組みました。実は本学に入学する前はMBA取得も考えていたのですが、今は心底JAISTに来て良かったと思っています。そう思えるだけの多様な研究と経験をしてこられましたからね。

—COEプログラムでの具体的な取り組みは?

平成16年からRA(リサーチ・アシスタント)として参加したCOEでは、「知識創造」「分野横断」の達成を目指してきました。「知のコーディネータ」としての役割とは何かを考え、由井プロジェクト主催の公開討論会にメンバーとして参加し、そこでの議論が土台となって見えてきた自分の目指す研究者像について、『研究哲学』という本で執筆する機会をいただきました。また、マテリアルサイエンス研究科・水

谷先生の研究室のゼミに参加し、実験の現場で何が求められているか、そこで自分に何ができるかを探ってきました。その結果、水谷研究室に「モブアルBUM」という実用的なシステムを導入することに貢献できたのです。このシステムの導入には、研究室での苦労を実際に体験し、そこでのニーズを汲み取ることが必要だったわけですが、それができたのはCOEにおける分野横断のコンセプトがあったからこそだと思います。

—COEの研究で賞をもらわれたそうですね。

平成17年の11月に神戸で第1回国際システム研究学会連合会(IFSR)が開かれました。その中の「知識科学に基づく技術の創造」をテーマにした会合で「6眼モデルに基づく研究開発組織におけるコンセプト創造方法論」と題して発表を行いました。これはCOEにおけるプロジェクトの一つとして遠山先生と研究を行ったもので、企業内研究チームを対象として、メンバーによるチーム内外の対話と実践から知識が創造されるプロセスを探るというものです。この研究で「最優秀学生賞」をいただくことができました。また、この論文は後にジャーナル(学術雑誌)に掲載されるという名誉にも恵まれました。それまでは経営学の研究者としての自覚が強かったのですが、この受賞と掲載は、自らの立場を知識科学の研究者へと見つめ直すきっかけになりました。

—今後の抱負や目標は?

3月までは科学技術開発戦略センターの研究員としてCOEの成果をまとめていきます。その後は、社会や組織の抱える課題解決に取り組むことで、社会や組織そのものの変革を目指し、それを通じて学問へ貢献できるような研究プロジェクトを企画・推進したいと考えています。そのためにも、魅力的で説得力のある未来像を描く能力や、プロジェクト遂行のための資金調達能力を身につけ、研究者としてステップアップしていきたいと思っています。

COEプログラムのトップランナー“DC”

DCとは？—大学院後期博士課程に在籍し、国から優れた研究能力を認められた「特別研究員」。
文部科学省は全国の各COEプログラムに1名ずつDCを置いてその研究を支援している。
本COEにおいてこれまで研究をリードしてきた二人のDCをご紹介します。

COE・DC 研究を語る 01 知識創造を引き起こす 「場のコーディネータ」

科学技術開発戦略センター/ポストドクター研究員

菊池智子 KIKUCHI Tomoko

Profile 1977年8月生まれ。兵庫県出身。静岡大学工学部機械科卒。
2001年4月、本学知識科学研究科入学。2007年3月、同博士後期課程修了。



2003年10月から卒業まで本COEの初代DCを務めた菊池さん。 「知識創造場」について研究を重ねてきた。

静岡大学では流体力学の勉強をしていたのですが、物理的な「物の流れ」でなく心理的な「人の流れ」について関心を持つようになり、そのような研究ができる環境を探すうちに本学に辿り着きました。

DCとなってからは、学内マテリアルサイエンス研究科の研究室を調査対象として、知識創造のための「場」の研究を始めました。「情緒安定性、外向性、知性、協調性、勤勉性」という心理学に基づく5つの観点か

ら、研究室という「場」における構成メンバーの性格とその変化について探ったのです。研究開発のための環境作りを目的とした取り組みです。

続いて行ったのは、「場の評価」についての研究です。こちらでもマテリアルサイエンス研究科の各研究室を調査対象とし、「研究活動」と「研究環境」についてのアンケートを行いました。学生に、自分たちの研究内容に対して自己評価を、研究室という環境に対して他者評価をしてもらったのです。そして、その結果を数値化・分析することで、各研究室の特徴づけを行いました。それによって各研究室における今後の可能性や課題を見出し、研究開発の支援に役立てることができると考えたのです。

ポストドクターとなった今でも「場の評価」の研究を継続しており、調査対象を先生方に広げています。今後は学内だけにとどまらず実社会においても調査を重ねていきたいと思っています。研究開発のための効果的な環境提案をしていけるとうれいすね。

COE・DC 研究を語る 02 地域再生を担う 「人」に迫る

知識科学研究科/博士後期課程3年 DC

千原かや乃 CHIHARA Kayano

Profile 1979年1月生まれ。石川県出身。玉川大学大学院文学研究科教育学卒。
2005年4月、本学知識科学研究科入学。



菊池さんに続いてDCに認定された千原さん。2006年4月から 来年3月まで「知のコーディネータ」についての研究に取り組む。

地域再生のために必要な「知のコーディネータ」の資質とスキルについて研究しています。地域社会と連携を図りながら再生のための課題を発見し、解決していける人材の育成を目的とした取り組みです。

まず、内閣府が各都道府県で選任した「地域再生伝道師」と呼ばれる方々や、国土交通省から「観光カリスマ100選」に選ばれた方々にインタビューを行いました。彼らの人柄や活動方法についての共通項を

見出すことにしたのです。北海道から九州まで全国10数ヶ所を回ってたくさんの方々にお会いしましたが、どの方も人間的な魅力に溢れ、お話を伺うだけでも貴重な体験となりました。

今はインタビューを継続しつつ、伺ったお話の中から共通のキーワードを抽出するということを行っています。その中で見えてきたのは、「知のコーディネータ」と呼ぶにふさわしい方々は皆しっかりと信念や哲学を持っているということです。知識や創造性、コミュニケーション能力を備えているのはもちろんですが、人からの信頼を得るためには「想い」や「情熱」が不可欠なのです。そういった「想い」「情熱」といったものは、学術論文では資質・スキルとして表現しにくいですが、何とかして組み込んでいきたいと思っています。

知識科学という領域はまだまだ漠然としている部分がありますが、言い換えれば可能性を追求していく余地が大きいということです。今後も研究に励み、それを生かして社会に貢献していきたいと思っています。

COEリーダーは考える⑤

研究室ナレッジマネジメント 中森 義輝

本COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」では、知識科学によって研究開発されてきた知識創造理論やツール、システムを、技術開発系研究室で適用することで、変貌を遂げつつある技術系大学院教育活動を支援するとともに、応用結果を理論にフィードバックすることで知識科学をさらに進展させるという目的が当初からあった。しかしながら、経営・情報系研究室で開発された理論やツールを、実験系研究室において直接的に適用することは、想定していたよりはるかに困難であることが明らかになった。学問間の文化や言語の違いを乗り越えて、相互理解を深め、真の協力体制に入ることができた頃には、プログラムを開始してからすでに2年が経過していた。

知識科学研究科の教員と大学院生による実験系研究室の参与観察やアンケート調査を積み重ね、「何が真に必要とされているか？」を問う地道な活動が、今ようやく功を奏し始めている。知識科学研究科とマテリアルサイエンス研究科の研究者が一緒に取り組む「分野横断プロ

ジェクト」による「大学院におけるイノベーション推進支援法の検討」、また、統合科学技術コースによる「分野横断的研究支援」と並行して、実験系研究室におけるナレッジマネジメントの試みが活発化してきた。今号で取り上げたマテリアルサイエンス研究科・水谷研究室の「モブアルバム」は知識共有の情報ツールであるが、並行してナレッジマネジメント理論を取り入れることにより、「研究室ナレッジマネジメント」の考え方が現場に定着しつつある。

中森 義輝

NAKAMORI Yoshiteru

北陸先端科学技術大学院大学
科学技術開発戦略センター長／
知識科学研究科長・教授



JAISTに行ってみよう! JAISTがやってきた!

～本学のプロジェクトが生んだ小学生たちとの交流～

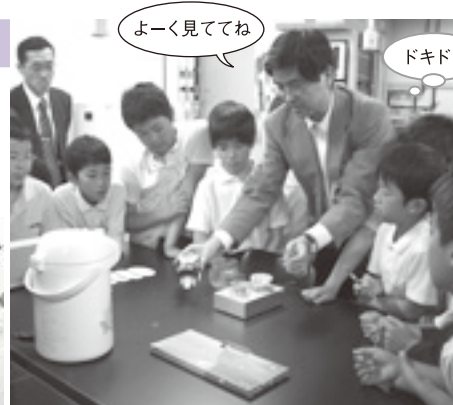
COEプロジェクトの一つ「サイエンスカフェ石川」や、能美市との学官連携プロジェクト「モバイルリテラシー教員研修会」での出会いが縁となり、地元の小学生たちとの交流が続いている。

JAIST探検隊! [5/31]

「モバイルリテラシー教員研修会」の参加者だった外山ひとみ教諭(能美市立和気小学校)は、担任する5年生21人と一緒に本学を訪問。小林俊哉准教授(科学技術開発戦略センター所属)の案内で、子どもたちは温度差による発電の実験や貴重な展示物である『解体新書』(安永3年版)などを見学して回った。見るもの全てが新しい子どもたちは大喜び。約2時間の訪問の後には「科学はとても役に立つことが分かった」「実験に失敗しても諦めない気持ちが大切だと学んだ」といった声が聞かれ、科学の楽しさを存分に味わった様子だった。後日には手作りの「JAIST新聞」が届けられ、本学関係者の笑顔を誘った。

本学を訪れた子どもたち。実験を見つめる目は真剣そのもの。

子どもたちが学んだことをまとめた「JAIST新聞」。



ようこそ和気小へ! [8/7]

続いて舞台は夏休みの和気小学校へ。サイエンスカフェ石川のメンバーである本学の学生たちによる特別授業が行われた。子どもたちは大粒の汗を流しながら液体窒素を使った超低温実験に挑戦。植物やゴムボールを凍らせて変化を観察した後、超伝導物質の浮遊に目を輝かせ、冷凍マシュマロの食感を楽しんだ。会場となった理科室には和気小の先生たちも詰め掛け、「普段の理科の授業では見られないものを」と企画された実験に、大人も子どももすっかり夢中になっていた。



和気小学校での実験。
-196℃で植物を瞬間冷却!



残った液体窒素を床にまくと…。
一瞬で気化してビックリ!

本COEとしては、今後も地元の各自治体と協議を重ねて、このような研修会や特別授業を継続していく予定。科学のフシギと楽しさを伝える新たな交流を演出していく。



KEY WORD①

サイエンスカフェ石川

本COEが主催する、科学をテーマとした専門家と市民のコミュニケーションの場。2005年から学内外を舞台に開催され、分野や組織の壁を越えて多くの交流が生まれている。

KEY WORD②

モバイルリテラシー教員研修会

子どもたちを取り巻く「ケータイ」環境の正しい理解を小中学校教員に広めるため開催。昨年は計4回、今年は保護者を対象に3回行われる。

日本初!

ISSS TOKYO 2007 開催レポート

中森教授が本COEを世界にアピール!

本COE後援のもと、8月5日～10日に渡って「国際システム科学学会」(The International Society for the Systems Sciences)が東京工業大学で開催された。この学会は、第二次大戦後、多くの学問において一気に複雑化・細分化が進んだことを受け、学者たちが分野を越えて共通理解を図る方法を探る場として開かれたもの。51年に渡る歴史の中で、今回が日本初開催となった。

国内のみならず海外からも多数の参加者が集まる中、9日には本COEの拠点リーダーである中森義輝教授が本COEプログラムの概要について講演。世界初である知識科学研究科の代表者が語る言葉に参加者は熱心に耳を傾けていた。この歴史ある学会の場は、最終年度を迎えた本COEの取り組みと成果を世界に向けて発信する絶好の舞台となった。



「分野横断型イノベーション」を図解して説明する中森教授。

国際色豊かな参加者が集まった。

知への扉は、あなたに開かれている。

分野横断型の教育プログラム 統合科学技術コース 平成19、20年度 募集要項

■選抜方法

これまでの専門分野を問わず、社会人、留学生を含め、あらゆる分野から意欲のある人材を受け入れるため、面接を主体に行い、学業成績証明書その他の提出書類と総合判定し、合格者を決定します。

■募集人員

○知識科学研究科:若干名 ○情報科学研究科:若干名 ○マテリアルサイエンス研究科:若干名

■入試日程

【博士前期課程】
平成20年4月入学

試験区分		資格審査提出締切 ※1,2	出願締切 ※2	選抜期日	試験会場	合格者発表	入学手続
4月入学	第3回	11月20日(火)	12月18日(火)	1月19日(土)～20日(日)	本学 東京 大阪	1月30日(水)	3月3日(月)～5日(水)
	第4回	2月5日(火)	2月26日(火)	3月8日(土)	本学	3月12日(水)	3月18日(火)～19日(水)

【博士後期課程】
平成20年1月・4月入学

試験区分	資格審査提出締切 ※1,2	出願締切 ※2	選抜期日	試験会場	合格者発表	入学手続
1月入学	10月5日(金)	10月26日(金)	11月19日(月)～26日(月)	本学	12月5日(水)	12月17日(月)
4月入学	11月20日(火)	1月11日(金)	2月1日(金)～13日(水)		2月20日(水)	3月6日(木)～7日(金)

※1 提出の可否は別途ご確認ください ※2 郵送の場合、当日消印有効

■お問合せ

①コース内容について

学生課教務係 TEL(0761)51-1936 FAX(0761)51-1959 E-mail:kyoumu@jaist.ac.jp
http://www.jaist.ac.jp/coe/ist_course/indexJ.htm

②募集要項請求・入試について

入学支援室入学支援係 TEL(0761)51-1962 FAX(0761)51-1959 E-mail:nyushi@jaist.ac.jp
<http://www.jaist.ac.jp/gakusei/>

先輩からのひとこと



清水 浩之 SIMIZU Hiroyuki

統合科学技術コース／知識科学研究科 近藤研究室所属 博士前期課程2年

Profile

金沢大学工学部物質化学工学科を経て、明和工業株式会社へ入社。2005年10月、本学に社会人学生として入学。研究テーマは「MOT交流を利用したバイオマス技術連携に関する研究」。

Message

3年前、JAISTの「いしかわMOT(技術経営)スクール」を受講して、「知識科学」というこれまでと違った学問に感銘を受け、「文理融合を図りながら、これからの社会で生じる課題を解決していかなければならない」と入学を志しました。

JAISTには産学官のあらゆる分野から先生方が集まっておられるので、思考、論法などが多岐にわたり、学内外での取り組みにも新鮮さを感じられます。実社会では科学技術を用いる際にも、さらに幅広い知識が求められます。従来の大学とは異彩を放つJAISTで、ともに学びませんか。

21世紀COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」とは？

「21世紀COEプログラム」とは、日本に世界最高水準の研究教育拠点(center of excellence)を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材の育成を図るため、平成14年度から文部科学省が実施している事業。「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」は、本学で採択された最初のCOEプログラムであり、平成15年度から始まって今年が5年目、すなわち最終年度にあたる。

本プログラムでは、先端科学技術の研究の場、さらに社会のあらゆる状況において、イノベーションをおこすための知識創造プロセスの研究、そして、それを担う人材としての「知のコーディネータ」「知のクリエイタ」育成に取り組んでいる。文理融合を、マテリアルサイエンス研究科[理系]と知識科学研究科[広い意味での文系]の連携プロジェクトという形で実践している点が、本COEの大きな特色である。

編集 後記

前回の堀プロジェクトに続き、水谷プロジェクトの取り組みをわかりやすくご紹介しようと試みましたが、いずれも文理の研究者がよい関係を築き、実践を重ねています。そこでキーマンとなっているのが、「知のコーディネータ」をめざすリサーチ・アシスタント(RA)たちです。彼らのがんばりと、専門の違いを越えて彼らを一人前の研究者として扱い、さらに大きく育もうという教員陣の懐深さ。この両方が備わっていることが、本COEにおけるプロジェクト成功の第一条件とも言えるかもしれません。

科学技術開発戦略センター

Knowledge-Beat【ナレッジ・ビート】 Vol.5 2007 秋

■発行 2007年9月

■発行所 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学 科学技術開発戦略センター
〒923-1292 石川県能美市旭台1-1(知識科学研究科棟Ⅱ・7階)
◇科学技術開発戦略センターホームページ
<http://www.jaist.ac.jp/coe/indexJ2.htm>

■制作 株式会社バステララボ

○本誌に関するご意見・お問合せ

TEL (0761) 51-1839 FAX (0761) 51-1767 E-mail:coe-secr@jaist.ac.jp



次号 Vol.6 2007 冬

【特集】次々に謎が解き明かされる。COEプロジェクト 潜入レポート第3弾！